



# 創刊五十号記念に想う



平成4年10月、本誌No-Dig Todayが創刊されて以来、早くも五十号の記念誌が発刊になる。折角の機会なのでこれまでの歴史の一端を振り返ってみる事にしたい。私はJSTTの設立を援助するため、発足以前から本会業務の企画・立案・実施等、ほとんど全ての面に参画させて戴いた。

まず協会の名称についてであるが、国際機関の元締めであるInternational Society for Trenchless Technology（国際非開削技術協会）から、日本の技術は素晴らしいので是非入会して貰いたい旨の書類が英国から届き、直ちにJapan Society for Trenchless Technologyの名称で、喜んで参加したいと届け出た。しかし日本名をどう翻訳するかが問題となった。準備委員会においてTrenchless Technologyは非開削技術とし、新しく生まれた技術であるから、非開削技術センターとすれば良いのではないかという意見が多く、一応その線で纏まった。

活動内容が広く知られていないこともあって、センターの名称の許で活動しているうちに、研究開発などのアカデミックなニュアンスが感じられないとか、出張の許可が取りにくい場合がある、などの障害があるとのことなので、結局非開削技術協会に落ち着き、今日に至っている。

わが国には既に社団法人日本下水道管渠推進技術協会なる団体がある。これはその名が示すように、日本の国内で、下水道の管渠を埋設するのに、推進工法の技術を用いて研究するという機関であり、業務の範囲が極めて制約されているのに気付くであろう。法人化すれば、補助金も出る代わりにいろんな制約を受けなければならない。JSTTの場合、その頃盛んに行われていた下水道事業ばかりでなく、電力、ガス、水道、工業用水道、電話など、地下にパイプを通して水やケーブルの道を作る事業に広範にかかわっており、法人化することは無理があった。また、制約のない自由な運営を図る方がよかろうということになり、理事や各種委員会の委員としては、各事業の代表者に入って戴いた。

政治経済の動向について慧眼をもっておられた機動建設工業株の木村宏一会長が、病のため第一線から身を引かれ、次いで(株)栄進建設の故高根昇社長、島根の(株)中筋組の故中筋幸男社長、四国の平山建設の故平山



遠山 啓

日本非開削技術協会名誉会長

昭徳社長等この道の大先輩を相次いで失い、五十号の紙面を飾るに大きな穴が空いたことは否めない。

この協会の年中行事の一つに、国際会議がある。各国持ち回りで、研究発表会とそれに付随した展示会が催されている。また、国内的には東京、大阪において研究発表会や技術講演会を催し、国際舞台のリハーサルを兼ねている。日本は1990年、大阪で実施した。近年、これらのイベントの内容が、次第に高度化し専門的になってきたことに気づく。ともあれわが国の非開削技術は、この協会が出来てから切磋琢磨して著しく発展したことは明らかである。これからもその勢いは低下しないであろう。そしてわが国は現在、国際的には主導的立場にありながら、開発途上の東南アジア諸国等、ISTT傘下諸国の計画には全く参加していない。いまのところ、国同士、業界同士の技術交換や業務上の取引などは皆無といってもよかろう。しかしこれでは我々が築いてきたISTTにおけるJSTTの先進的なあり方として如何なものであろうか。それには、これらの技術指導を必要とする諸国へ出かけることが出来る体制づくりが必要ではなかろうか。これにはまた、多額の資本が必要であり、今日の情勢から見て、その解決は難問である。しかし自動車の製造業者は、廉価で大気を汚さない小型車の量産体制に踏み切った。途上国においてもわが国の轍を踏まないように車社会の急速な到来を見越して地下のインフラ整備に着手する時代がきていると思われる。非開削技術協会創立以来二十年、次の飛躍を考える時がそろそろ近付いているようだ。